

Georges Mounin : Introduction à la  
Sémiologie. Les Editions de Minuit. 1970

堀井 令以知

記号学に関するムーナンはこの論文集は、わがくにのロマン語研究者にとっても有益であろう。記号学の資料を求めて、ロマン語圏の調査に赴く人たちにとっては、一読に値する著述である。記号学は、あらゆるコミュニケーション体系の一般的科学として、ようやく普及し始めた新しい学問領域である。

Prêt-à-jeter の時代ともいわれる現今、その一步を踏みだした記号学は、果して今後とも堅実な歩みを続けることができるであろうか。本書はその試金石としての意味を持っているといえることができる。18の論文と Appendices を検討すれば、記号学の領域の限定が、いかにむずかしいかが分ると同時に、記号学の抱える問題の複雑さと未知の分野への興味と不安を感じることであろう。ムーナン自身も、この論集に記号学の全分野を網羅しようなどとは考えていないし、龐大な範囲のなかで、かなり分りやすいと判断される事実だけの記述にとどめている。

この論集を、その取扱う論述の態度から次のように三つに分けて検討することができるように思う。第一は、記号学の位置づけと方法に関する論文、第二に記号学の理論を具体的に適用しようとする論文（家紋、化学記号、道路標識、劇のコミュニケーションに関するものなど）、第三には、記号学の著作にたいする批判である。記号学を言語学の一部とする Roland Barthes、構造人類学の Lévy - Strauss を扱った論文では、言語学の用語を他の領域に適用する場合の危険について指摘している Charles Morris や Hjelmslev の記号学についての考えも紹介され、Jacques Lacan の文体特徴についても簡単な記述がある。Charles Saunders Peirce についての考察を欠いていることについては、ムーナン自身の弁明がある。

記号学の対象は、Buyssens にとってはコミュニケーションであり、Barthes にとっては意味作用であるが、著者は Prieto の説を引用して冒頭論文に Sémiologie de la communication et Sémiologie de la signification についての議論を展開している。記号学の位置づけと方法を述べたものの中では、Les systèmes de communication non linguistiques et leur place dans la vie du xx<sup>e</sup> siècle がすぐれているように思う。BSLP tome 54, fasc. 1 (1959) に発表されたこの論文から、ムーナンの記号学にたいする態度をよく知ることができる。

ヴェンドリエスの『言語』には、文字についての一章がある程度で、一般に、言語学の著述には、発話行動以外の記号についての記述は少ない。身振語についての考察もなされることはあっても、比較的に重点の置き方は低い。その点、La mime contemporaine (p.

169~p. 180) は、この方面への関心をそそるものがある。ソスュールによって示唆された記号学は、「社会生活の中で、記号の生活を研究する科学」であり、社会心理学の一部を構成するものである。ムーナンは、音的記号にもとづくコミュニケーション体系の研究（言語学）とコミュニケーション全体を研究する科学（記号学）とを混同すべきではないという。従って、ムーナンにとっては、非言語的コミュニケーションの研究を実践することが、

記号学の第一目標である。

非言語的コミュニケーションは「言語以外の言語活動」ともいえる。その手順としては三つの基準が考えられる。まず第一は、体系的か非体系的かの基準である。道路標識は安定した不変の記号を用いるから、体系的の信号（標識）の手順である。（p. 155以下の *Une étude semiologique du code de la route* を参照）これにたいして、洗濯用品の広告などは非体系の手順である。第二は、信号と形態のあいだに内在的関係があるか、外的関係にすぎないかの基準である。看板が店の標識そのものとなる内在的関係にたいして、緑の十字と薬局とは外的関係にある。第三は代替の可否かの基準である。メッセージと伝達記号は、話の場合は直接の関係であるが、モールス信号は代替の手順である。これら三つの基準を組合わせて整理すれば、記号学は次の八つの観点から考察することができる。①直接内在的体系②代替的内在的体系③直接外在的体系④代替的外在的体系⑤直接内在的非体系⑥代替的内在的非体系⑦直接外在的非体系⑧代替的外在的体系。

文字、聾啞者の指話法、海事信号、モールス信号、暗号などは、代替の手順の標識であり、発話活動を補なう二次的言語活動といえる。このほか、鉄道の時刻表には拘束的な表意記号が記され、空港の出札口にはシルエット画法がみられる。文字が二重の分節作用（音素と記号素）を再生するのにたいして、時刻表やガイドブックの表意記号は、第一分節作用しか知らない性質のものである。旅行案内書には、発話の言語活動による翻訳を必要としないでも理解できるデッサン・シルエットの表意記号が大きな役割を果たしている。

体系的コミュニケーションの手順として、数字は今日では多くの情報を与えている。日付、時間、ページ、水道や電気の消費量、切符、伝票、明細書にみられるように、日常生活において数字の占める重要性は大きい。列車の時刻表にみられるように、数字による非言語的コミュニケーションの補助として言語活動が働く形態も考えられる。計算は、極端に広まった非言語的コミュニケーションの手段であり、物理学や数学の書物において計算記号の占める比率は大きい。また、記号論理学で用いる論理記号も非言語的で体系的な手順といえることができる。MTS, CGS, MKSA のような度量衡基本単位をはじめ、ヘルツ（周波数の単位）ワット（仕事率の単位）、オーム（電気量の単位）、ルクス（照度の単位）、マクスウェル（電磁単位）の記号も、すぐれた構造的厳格さを保っている。1972,  $\sqrt{2}$ ,  $p < q$ , kwh のような表意文字は、発話行動での「語」とはちがった記号である。これらは第一分節作用しか知らない性格のものだからである。諸言語において数字の5を, cinq, five, fünf, pende, khamisa と読むが、いずれも同じ観念をあらわしている。数字を非言語的コミュニケーションとするのは、それが第一分節作用の上にのみ基づいているからである。数字を知ることと数字を読むことのあいだのギャップは、外国語学習において一つの問題を投げかける。「本」という対象からフランス語 livre へ、livre からロシア語 kniga へと移る間接的方法にたいして、対象「本」から直接的に kniga を知る方法が外国語習得上、有効である。ところが、外国語のすらすら読める学生でも数字の読み方につまづきやすいのは、数字が間接的方法によって習得されるからであろう。

道路標識も、非言語的コミュニケーションの手順である。ドライバーは、フランスの県道で、進行方向右側に100キロについて、200～300の記号を認めるという。交通量の多い国道では300～400の記号、都会を横断すれば、おそらく500の記号に出会うという。都会の中にいれば交通標識だけでも800～1000の記号に遭遇する。駐車、停止、危険を示す掲示板、信号機、方向の点滅信号、横断歩道の標示、旅程の指示など、ドライバーは、

こうした情報とたえずコミュニケーションを行なっていることになる。道路標識は豊富で複雑な非言語的の体系である。

地図や気象図の凡例は、記号表記による普遍的コードである。われわれは凡例の示すところによって、川、土地の起伏、森、集落、海岸などを読みとることができる。ミシュランの地図は73の異なる記号の凡例を含み、その記号の一部は国際的にも通じる。地図を読むことは、話しことばの代替的コミュニケーションの体系、非言語的コミュニケーション体系への理解につながる。地図、図表、グラフ表示にたいする学校教育は、非言語的コミュニケーションの重要性を認識させるのに役立つことであろう。

本書には、非言語的コミュニケーションの記号について、いくつかの具体例が示されている。103ページ以下の「家紋」についての論文は、パリのミュゼ・ギメで開催された<Emblèmes, totéms, blasons>についての展覧会での展示品にヒントを得て記号学的考察をしたものである。楯の紋章について機能的な検討がなされ、歴史的に紋章の機能が変化していった事情、承認のしるしとしての紋章が、所有者の固定名詞のシンボル、家系のシンボルとなったことなどを考察している。このほか、この論集では、Von Frischの蜜蜂のコミュニケーションについて Benveniste 説を紹介し、人間言語のコミュニケーションと動物の非言語的コミュニケーションの関係を論じ(41ページ以下)、Appendices では、André Leroi-Gourhan, René Passeron, Jacques Bertin, J. Prieto, E. Buysse の著書についての批評が集められている。

龐大な記号学の領地を、どのように限定し整理したらよいかについて、ムーナンは態度はまだ決まっているとはいえない。Ch. Metz の Langage et cinéma, Larousse (1971) のような映画の記号学的考察、Roland Barthes の Système de la Mode, Seuil (1967) のようなモードへの適用も、ムーナンがこの論集では取扱わなかったものであり、ここにも記号学が広い範囲の現象を含んで多様であることがうかがえる。本書中のミスプリント(p.20 l.23 idéographique → idéographique, p.28 l.8 ailleurs → ailleurs のような)は再版のときに訂正してほしいと思う。なお、拙稿「記号学と言語学」(文学論叢47輯, 昭47・3)を参照していただければ幸である。

(1972・9・28)